



Title	『神曲』序歌
Author(s)	竹友, 藻風
Citation	語文. 1951, 2, p. 35-37
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68372">https://hdl.handle.net/11094/68372</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 『神曲』序歌

竹 友 藻 風

『神曲』は一大曼陀羅、その内容はダンテといふ一人の詩人が『往生要集』に展開せられたやうな他界を遍歴する旅路の記録である。もとより佛教の世界ではなく、十三世紀のイタリア人がその実在を確信してゐたキリスト教——ローマ・カトリック教——の宇宙全体であるが、その結構と、それを統一する原則と、又、その寓意的表現の重大な個所に於いて、私ども日本人には屢々平安朝の佛教を想起せしめるものがある。そこにどのやうに關係があるかといふことは日本に於ける『神曲』研究者に課せられた向後の問題であり、その問題を解決するためにはインドよりアラビアとギリシアを経てイタリアに到達した東洋文化と、支那と朝鮮を経て日本に到達した東洋文化を比較する必要がある。この径路を説明することは容易なことではないが、結果は歴然たるものである。唯、『神曲』は飽くまでも一人の魂の閑歴であり、詩的表現の幽秘を極めた藝術である。『往生要集』でもなく、『神学大綱』でもない。一篇の文学であり、ヨーロッパの中世紀を中心として古今東西に行きわたる思想的背景に結びついた、一個人の体験を述べたものであると考へなければならぬ。構成上、『地獄界』『淨罪界』『天堂界』と三部に分たれ、『淨罪界』と『天堂界』は各々三十三歌、『地獄界』だけは三十四歌、都合百篇の歌章(Canto, Cantica)より成る。一歌章は通例「三〇行内外を含み、一行は十一熱音で、最後の熱音が弱、それ故に、

直ちに次の行に移る律動の形を具へ、押韻は三韻法(terza rima)と称へるもので、三行毎に連結せられてゐる。従つて、三行の聯体のやうに見えながら、全体としての流動の姿を失はず、明瞭にして暢達、殆んどあらゆる詩想の表現に適するものとなつて居り、寓意と象徵はもとより、叙事、論述、諷刺、釈教、叙情的な詠歎にも、戯曲的な對話にも、写實的な描写にも、自由自在に用ゐ得るものである。ダンテはプロヴァンスに行かれたシルヴェンテス(sirventes)といふ詩形に暗示せられたといふことであるが、本來のシルヴェンテスは論争論難の外に用ゐられたことがなく、その用例も亦極めて限られたものであつた。これを用ゐてこの一大伽藍の建築の基礎に置いたのはやはり詩人の独創力に帰すべきであらう。

百篇の歌章の中、『地獄界』だけが三十四歌になつてゐるのは、その第一歌が全篇の序歌ともいふべきもので、その中に他界遍路を志すやうになつた事情が明らかにせられてゐるからである。

われひとの生いづの路のなかに

ますくなる道あと絶えてなかりける

くらやみの森をよぎりて、われありき。

この「われありき」"mi ritrovar"といふ言葉には偶然そこに自分を発見したといふ意味がほめかされてゐる。又、「なかりける」は「なかりしかば」と解すべきやうになつてゐる本文もあるが、そ

れに従ふとすれば訳も亦少し手を入れなければならぬ。それはとにかく、ここに「生の路のなかがろ」とあるのは旧約聖書の「詩篇」第九十篇第十節に『われらが年を経るは七十才に過ぎず』とあるのを典拠としたものであり、ダンテは『饗宴篇』の第四篇第二十三章と第二十四章にも三十五才をもつて人生穹窿門の頂点と定めてゐる。すなはち人生の行路七十年のなかば、三十五才の時と、いふことであるが、一二六五年に生れたダンテの三十五才の時はちやうど一三〇〇年であつた。その年ダンテはフィレンツェの総督の一人に選ばれ、後幾程もなくしてその都から追放せられたのである。『新生』の最後にベアトリッチェを失つてから後の心境を述べ、『されば万物それに依りて生くる者の御旨に依り、わが命にしてなほいとせの齡をたもちえなば、かつていかなる女性につきて物せられしこともなきほどのものをこの君につきて物せむと思ふ。』と述べてから、ここに至るまでの才月は思想の上にも、行狀の上にも自ら顧みて慚愧たるものがあつた。その結果、追ひ込められたものが、「ますぐなる道あたえてなかりける／くらやみの森」であつたといふのである。ダンテは更にその森の如何に危険なものであるかといふことを述べた上、ひとつの丘、後に謂ふ飲樂山の麓に辿りつき、その肩が太陽の光、くらやみの森に迷ふわれならぬ「よそびと」を「すべての道にしるべする／遊星の光」につつまれてゐるのを仰ぎ見たと言つてゐる。ダンテの天文学はエジプトの天文学者プトレマイオスのそれに従ふものであり、それに依ると、太陽は遊星の一つで、「天堂界」では第四天を支配するものとなつてゐる。この光を見てやうやく心をしづめ、斜の原を通つて行かうとする時しもあれ、行手の道に立ちふさがつたのは一頭の豹であつた。斑点のある華麗な

毛皮におほはれ、ぐいぐいと押し寄せて來るので、幾度かもと來た道へふりかへつたのであるが、時刻は朝、そのあけがたの頃であり、時節は春分の後、この時の太陽は白半宮の中を駛るその年の始の太陽で、あだかも復活祭の聖金曜日の朝の太陽であつたから、その光を頼んでなほも望を失はなかつたのであるが、そこへ又、一頭の獅子が現はれ、更に牝の狼が攫せさらばへた姿を示すに至つてダンテは終に丘の嶺には登れないものと思はざるを得ないやうになつた。豹は色慾を、獅子は驕慢を、狼は貪婪を象徵する。ダンテはおそらく彼を迫害してその志を遂げしめなかつたフィレンツェの市民の特性を諷したものと思はれるが、『エレミヤ書』第五章第六章に『林より出づる獅子は彼を殺し、アラバの狼はかれを滅し、豹はその邑をねらふ。』とあるのが直接の典拠であらう。かうして一步一步、再び「太陽の默せる方」即ち「くらやみの森」に押しかへされて行く時、この原の中に何処からともなく一つの影のやうな人の姿が見えたので、ダンテは思はずそれに向つて救を求める。すると、その人は世を去つてから既に久しいローマの詩人ヴィルギリオ・ヴェルギリスの靈であることを告げる。

『あはれ、他のうた人の榮譽と光、

わが長きいそしみとおん卷求めし

大いなるわが愛の驗もあれよ。

君はわが師に在し、作者に在す、

われに名を成さしめし清雅の体を

ただ君に依りてこそ學びたるなれ。』

とあるやうに、ダンテは事実ヴェルギリウスを学んだのであり、『アエネイス』や『農歌』や『牧歌』の影響は『神曲』の隨處に看取せ

られる。が、この場合にヴェルギリウスが現はれたことについてはその他にも理由がある。それは第一にローマ建国の叙事詩を作った詩人としてイタリア人の中に絶えず憧憬の対象となつてゐるローマの精神、ダンテの場合には『帝政論』の理想を具現する者であるからであり、第二には第四『牧歌』と『アエネイス』第六巻に於ける言及に依つてキリストの降臨を予言した詩人と考へられ、ローマに於けるパプテスマのヨハネ、一種の予言者のやうな者と考へられたからであり、第三には中世紀を通じてヴェルギリウスは一種の靈能を具へた賢人、或は魔術師のやうな者と考へられてゐたからである。第一と第二はダンテの著作を通じて意識せられてゐる重大な理由であるが、第三の理由はこの場合のヴェルギリウス出現を最も平明にその頃の読者に理解せしめるものであつたと思はれる。「ヴィルギリウス占卜」Sortes Virgilianae」といふ風習はヴェルギリウスの詩集をとり、運に任せて開いたところを占卜の手がかりにするものである。ちやうど、そのやうに今や絶対絶命の窮地に陥つたダンテを導いて幽冥の彼方に活路を発見せしめるものはヴェルギリウスの外にはあり得ないと感ぜられたのである。何故ここへヴェルギリウスが現はれたかといふことは次の歌章、「地獄界」第二歌の中に説明せられてゐる。それに依ると、聖母マリアの悲嘆はダンテの窮狀に注がれ、ダンテの守護の聖女であつたルチアを使として、既に天上の靈となつてゐたそのわかき日の恋人ベアトリーチェを動かし、ベアトリーチェは立つて天上の座を去り、地獄の辺境、リムボーに住むヴェルギリウスを訪れ、ダンテのために嚮導の勞をとることを頼んだからである。そこで、ヴェルギリウスの言ふには、現在、障碍となつてゐる三頭の獸は「獵犬」が來て、奈落に逐ひ落すのを待つ

より外に如何ともすることが出来ない。「この「獵犬」はダンテがハインリヒ七世に依るイタリア統一の有力な味方として望を嘱してゐたラヴェンナの領主カン（カン或はカーネは「犬」・グラнде・デルラ・スカラのことを言つたものであらうと考へられてゐる。）この際、ダンテのとるべき道は地獄へ降りて阿鼻叫喚の実況を見つくした後、淨罪の丘を登り、その苦患をつぶさに眺め、さて、その後は自分の手から離れ、自分よりも優れた者（ベアトリーチェ）の案内の下に天堂界を遍歴して神のもとに辿りつくことであると、ダンテはその言葉に従ひ、導かざるがままに先づ地獄通路の旅に上つた。これが『神曲』序歌ともいふべき「地獄界」第一歌の梗概であるが、ベネデット・クロチエも言つてゐるやうに、この序歌とそのあとを受けた第二歌は『神曲』の中の最も秀れた部分ではなく、幾度か構想を改め、推敲を重ね、苦澁沈滞の後、やうやく現在の形になつたものであり、第三歌の「地獄の銘」のあたりから漸次調子がよくなり、終に近づくに従つて愈々その高調を昂め、更に「淨罪界」と「天堂界」までその調子を持ちつづけたのである。「地獄界」の絶唱は第五歌にフランチェスカ・ダ・リミニの悲恋を敍べた一節と第三十三歌にウゴリーノ伯爵の非業の最期を描いた一節であると言はれてゐるが、その他にもオデッセウスの後日譚を述べたところや、涼結地獄の慘憺たる描写、或は早春新緑の季節に於ける星宿の移りかはりと牧人の悦を述べた美しい一節などは容易に忘れることの出来ないものである。深刻なものや悲痛なものに至つては挙げて數へることが出来ない。序歌はただそれらの秀抜な光景に導くための手引であり、他の部分に比較してよほど見劣りのせられるものである。